

# 園長のまなざし

## 第6回

### 小さき太陽たちへ

藤方洋子

ひと雨ごとに緑萌える季節、この季節の緑は春先の成長に後押しされるかのように、みずみずしさを増し輝き放っているように見えます。それは、入園期の不安や心細さを見事に乗り切った年少組の姿とも、またより自信を深め、たくましさを増した年長組の姿とも重なり、私の心を温かくします。その緑輝く六月、この時期こそ、入園以来慌しかった日々を振り返り、子どもたちの成長を見つめ直す好機のように思います。

「園長先生、見て……」。四月いつぱい、顔をくしゃくしゃにしながら泣き叫んでいたA君の笑顔を、小さな傘の中に見つけたのは、つい先日のことです。手のひらには、ちよこんと小さなカタツムリ……。

A君の自信に満ちあふれた声に、宝物を見つけた喜びと共に、小さな命に向けられる限りないやさしさを感じとり、今、確かに幼稚園の生活を楽しみ、生きていると感動を覚えたものです。

同時に、雨のひとしずく一雫一雫が地の中に吸い込まれ、生



ある物へのかけがえのない命の水となるように、A君の心の中にも、園生活のさまざまな出来事が糧となり、宝物のように蓄えられていくはず……。そう願わずにはいられない一瞬でした。

「外には雨が降りつづけている。部屋の内は笑い声で晴れわたっている。窓硝子はぬれて曇っている、子どもたちの顔はみんな明るく輝いている。(中略) 天の太陽は雲につつまれる日があっても、ここの子さい太陽たちは、いつだって好天気だ」

(倉橋惣三／著『倉橋惣三文庫3 育ての心(上)』  
フレーベル館 二〇〇八年)

雨音が子どもたちの声と重なり、ふと、敬愛する倉橋惣三氏の言葉が脳裏を過ぎるとき、子どもものそばに立てる喜びに満ちあふれ、思わず六月の空を見上げる私です。  
(東京都 墨田区立八広幼稚園)